巻頭言

仏教学部長　光地英学

科学物質文明は日進月歩、目覚ましい発達を遂げつつある。常に向上変化して休まない。その社会生活に、将又、家庭生活に寄与するところの測り知り得ないところのもののあることは万人ひとしく肯認するところである。これに対し内面の精神文化は必ずしもそれと軌を一にしない。というのは、科学の如き向上変化性がないという点である。精神面の代表は宗教である。

宗教の志向する永遠を貫ぬく心の世界こそ、時空一切を包み、人々に永遠の光りを与えるものである。科学は未来に向っての理想遂求の姿勢であるのに対し、宗教は、理想を既往の教祖に置く、一は変りゆくものであり、一は変らざる不変の真理を師標とする。古今不変の真理を本領とする宗教の、その母ともいうべきもの、それはわが仏教である。仏教は諸宗教中、その思想の領域に於いて、最も広大にして深淵性に富む、至極の合理性を擁む最高の宗教である。いう如く仏教はその教理面にて、偉大な特質を内示するものである。

かかる思想の宝庫たる仏教を、単に東洋のみに止むることなく、広く世界に宣布することこそ、乾燥しがちな現代社会において、更には信仰不在な現実界において、お互い仏教学徒としての世界人類に貢献する所以のものでなければならない。

今より遡ること三九一年、文禄元年（一五九二）に源初を有し、幕府の昌平校（東大の前身）とともに天下の二大学府と称せられた本学が、既に四〇〇年に垂んとする伝燈に輝やく今年、更に明治十五年（一八八二）十月十五日、麻布日ケ窪に移ってより百年という。今、百周年の地平に立って、本学部所属の各位が、使命ともいうべき次の二点、更には将来に向って不可避の次の一問題を荷負うものではなかろうか、を敢えて問いたい。

一は上記の仏教思想の世界的弘布である。この遠大な抱負

の許に、更に研鑽の実を遂げんとすることでなければならない。仏教の教相面の世界広布も尊く、是非にと期待したい。それとともに、仏教の世界化の志念に燃えた伝布者が、本学部から排出することを切望したい。学と行と信念一倶の弘布者である。先年、大正大学卒（真言宗智山派僧籍者）の一偉材が単身印度に渡った、それは仏教の母国印度に、再び仏教を還帰せしめたい志願に発してのことであった。仏教を宣布すべく彼の誓願は三であったといわれる。一は名誉を捨てる、一は利益を捨てる、一は命を捨てる。かかる尊い菩薩が、本学部からも打出することを要望したい。必ずそして間違いなく。次の他の一は、本学内における仏教精神の維持昂揚である。二万有余の学生を擁する綜合大学のピラミッドの頂点に位する本学部が、よく仏教・禅の精神、即ち建学の精神を、他学部との和合裡、徹底宣揚してゆくべきことこそ、不変不動の任務たるべしという自覚を、この際、現在将来に渉って、更に鞏化すべきではなかろうか。単なる百年という年齢を数える愚に堕ることなく、そこに意義あらしめるところにこそ、記念というものの真の精神が存することを銘記すべきであろう。

なお一の問題点とは何であるか、それは仏教学部の本質ともいうべき宗門僧侶の養成ということである。これは本学部に課せられている宗門的使命でもある。この使命遂行は開けゆく本学において、漸く旧態を踏襲し難い状態たらしめている。そのことは年と共に速度を加えているの観すらある。蓋し、年一年と在俗一般学生の仏教学部志望者の増加があり、概して優秀なそれら入試志望者が、僧籍のそれらの入試合格を、従前の如く安易ならしめない傾向があるからである。これは一喜一憂の現象である。一喜というのは宗門外一般学生の志望の増加であり、一憂というのは、その為の宗門内学生の受ける影響である。このことと、他学部入試者の、年とともに向上している学的水準と、このところ文部省通達に依る毎年入試採用率の枠の縮小化などとも相俟って、宗門僧籍者の入試受入れ問題は、次第に深刻の度を深めているという点である。

各自この記念の年に当り、如上の諸件を中心とした認識と、これが対処に充分な熱意を持ちたいものである。